南部山遺跡発掘調査報告書

—広島市安佐南区上安所在—

2006年12月

株式会社パスコ
財団法人広島市文化財団

はしがき

近年、携帯電話各社の基地局の増設は急ピッチで進められており、あたかも時間競争の感があります。また、基地局に求められる条件として周囲が死角なく見渡せることがあげられますが、それは遺跡の良好な立地と重なる部分が多く、文化財保護の観点での調整を求められる事例が多くなってまいりました。

一方、携帯電話基地局の設置工事は、開発面積も100㎡前後と限られており、調査着手についてもかなり短期間での対応を求められるなど、調査実施の点で様々な問題点を含んでいます。そのため、今回は、民間の調査会社と広島市文化財団が共同して調査にあたるという、まったく新しい形態での調査になりましたが、おかげをもちまして無事終了することができました。

今回調査を実施した南部山遺跡は、かつて毘沙門台遺跡、毘沙門台東遺跡という広島市域を代表する弥生時代集落跡の所在地の近くに位置してはいますが、従来の集落跡の立地から考えればかなり高い標高の場所から確認されており、集落跡の分布を考えるうえで新たな資料を加えることができたと言えるでしょう。

最後に、ご協力いただきました関係機関、関係者の方々ならびに調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

財団法人広島市文化財団
株式会社パスコ

例　　言

1．本書は、広島市安佐南区上安字南部山に所在する、NTT ドコモ中国携帯電話毘沙門台基地局新設工事に伴い実施された南部山遺跡の発掘調査報告書である。

2．現地発掘調査は 2006 年（平成 18 年）7 月 12 日から同年 8 月 22 日までおこなった。整理調査および調査報告書（本書）作成業務は、現地調査終了後にとりかかり、同年 12 月 20 日に終了し本書を刊行した。

3．調査は財団法人広島市文化財団の指導の下、株式会社パスコが受託し、小柳太一・田部秀男が担当した。遺構写真の一部は有限会社Ｎ＆Ｎ写真工房　長石憲史に委託した。

4．本書の編集は田部・小柳がおこなった。執筆は若島一則（第１章）、田部（第２～４章）が担当した。作図は小柳・田部・佐藤好司が担当した。遺物写真撮影は富田武・田部がおこなった。

目　　次

はしがき
例言
目次

1　はじめに …… 2
2　南部山遺跡の立地と環境 …… 3
　(1)　南部山遺跡の位置と地形 …… 3
　(2)　周辺の遺跡 …… 3
3　調査の要綱 …… 6
　(1)　調査の方法 …… 6
　(2)　基本層序 …… 6
4　遺構と遺物 …… 8
　(1)　竪穴住居跡 …… 8
　(2)　土坑 …… 10
　(3)　遺構外出土遺物 …… 11
5　まとめ …… 12
　　引用・参考文献 …… 12

挿　図　目　次

第１図　南部山遺跡の位置と主な周辺遺跡分布図 …… 4
第２図　南部山遺跡の位置と周辺地形図 …… 5
第３図　基本層序図 …… 6
第４図　南部山遺跡遺構分布図 …… 7
第５図　竪穴住居跡実測図 …… 9
第６図　第１号土坑実測図 …… 10
第７図　出土遺物実測図 …… 11

図　版　目　次

図版１　１　遺跡調査区全景　２　遺跡からの眺望
図版２　１　遺跡遠景　２　遺跡全景　３　竪穴住居跡完掘状況　４　竪穴住居跡覆土状況
　　５　第１号土坑完掘状況　６　第２号土坑完掘状況　７　第３号土坑完掘状況
　　８　作業状況
図版３　出土置物

1 はじめに

広島市市民局文化スポーツ部文化財担当(以下「市民局」)は、平成18年1月17日に株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国ネットワークから、エヌ・ティ・ティ・ドコモ毘沙門台東基地局建設工事事業地内における埋蔵文化財の有無並びに取扱いについての照会を受けた。市民局ではこれを受けて、事業地内の現地踏査及び試掘調査を実施した結果、安佐南区上安町字南部山において、弥生時代の集落跡等(南部山遺跡)を確認し、その旨を平成18年5月25日回答した。以後、当該遺跡の取扱いについて協議を重ねたが、計画変更による遺跡の現状保存は困難との結論に達し、工事着手に先立って発掘調査を実施し、記録保存の措置を講じることとなった。

そこで、これを受けて、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国ネットワークから実際の工事実施を依頼された株式会社竹中土木と、発掘調査の管理・指導を行う財団法人広島市文化財団及び実際に発掘調査を行う株式会社パスコが発掘調査実施についての契約を締結し、現地調査を平成18年7月から8月にかけて、報告書の作成を同年8月から12月にかけてそれぞれ実施した。

発掘調査の関係者は、下記のとおりである。

調査委託者　株式会社竹中土木
調査主体　財団法人広島市文化財団(調査管理)
調査実施　株式会社パスコ
調査担当者　若島一則(財団法人広島市文化財団)
　小柳太一(株式会社パスコ)
　田部秀男(株式会社パスコ)
調査補助員　青山昌市　井隅廣美　坂田敏雄　御堂河内幸夫　富田勝
　秋田理也子　上杉日豊武　斎藤麻子　柳原理恵

現地調査から報告書作成にいたるまでには下記の方々や機関等からご教示・ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

荒川正巳・池之知広・伊藤雅乃・植田真・日下部亮治・熊野真郎・小柳リラコ・酒井中・清水康治・高梨雅幸・長石紀子・福家英二・森川正秀・脇坂光彦・株式会社大正組・株式会社竹中土木・財団法人広島市シルバー人材センター・C-ファクトリー・末岡建設株式会社

2　南部山遺跡の立地と環境

(1)　南部山遺跡の位置と地形

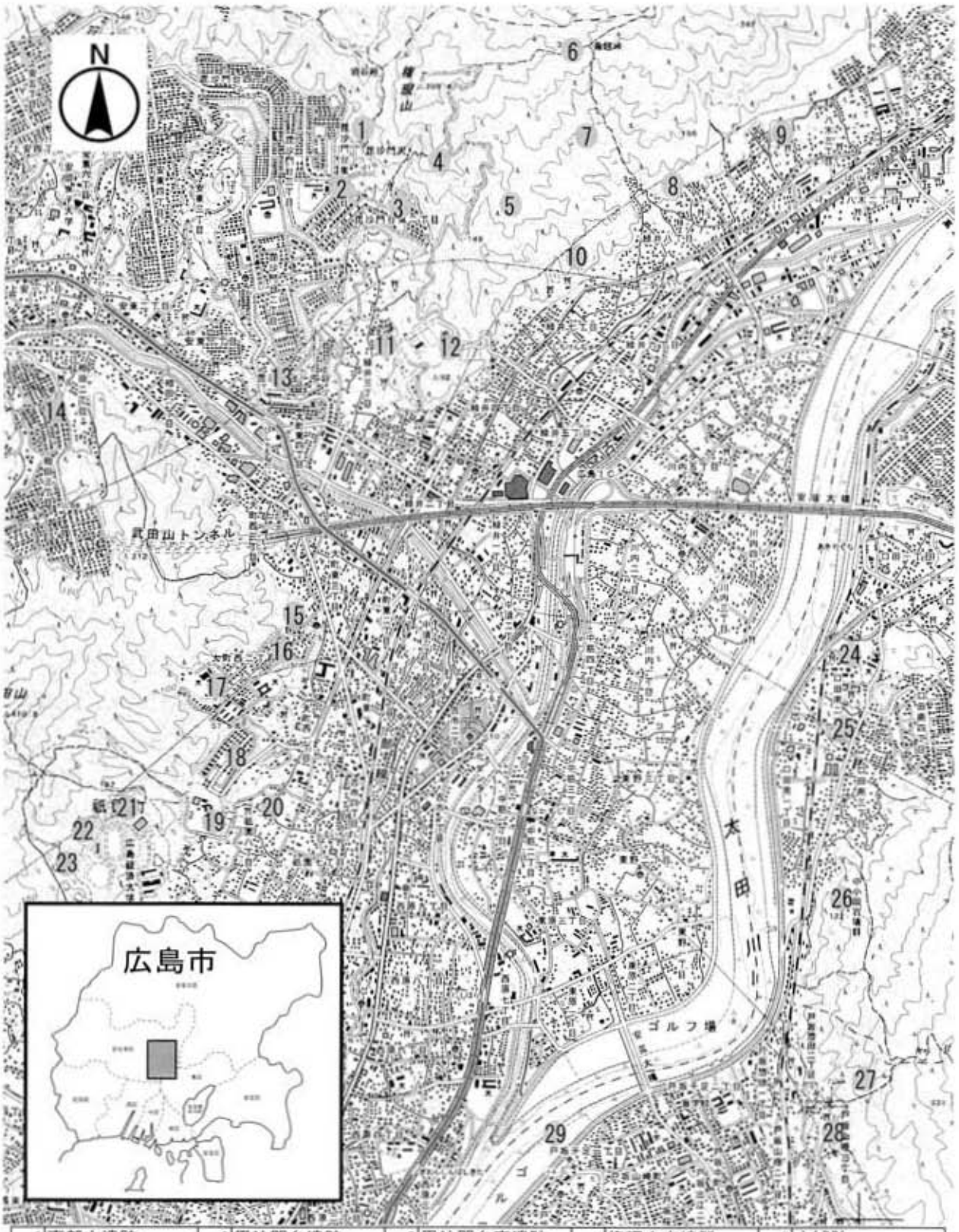
南部山遺跡は広島市安佐南区上安町字南部山に所在する。遺跡は権現山南西側斜面、標高220 m前後の比較的広いテラス状になった尾根上に位置している。直下には毘沙門台団地が広がっている。南西方向は武田山に対面し、南側には広島市街から広島湾、江田島まで視界が広がる立地である。言い換えれば広島湾の最奥部にあたり、かつ県北部から南流してくる大田川と西からの安川の合流地点でもある。現在では山間部への入口といった印象をもたれがちなこのあたりではあるが、弥生時代頃の推定汀線も近く（高下 2003）、まさに海陸交通の要所を眼下にした好立地であるといえよう。

現在遺跡下には広大な団地が広がっており、その北端から急傾斜の崖上に遺跡は立地している。これは1980年代の団地造成によって大きく地形が改変されたためで、本来の景観は異なっている。旧来の本遺跡は、安川河岸まで張り出していた権現山から派生した丘陵の上部にあたる。この丘陵には小さな谷が入り込んでおり、現在でもわずかに残っているが、開発以前は耕作地として利用されていたようである。また、このような谷地上端部は標高200 m近くまでおよんでおり、今でも湧水している谷頭は今回調査地点に近接している。

(2)　周辺の遺跡

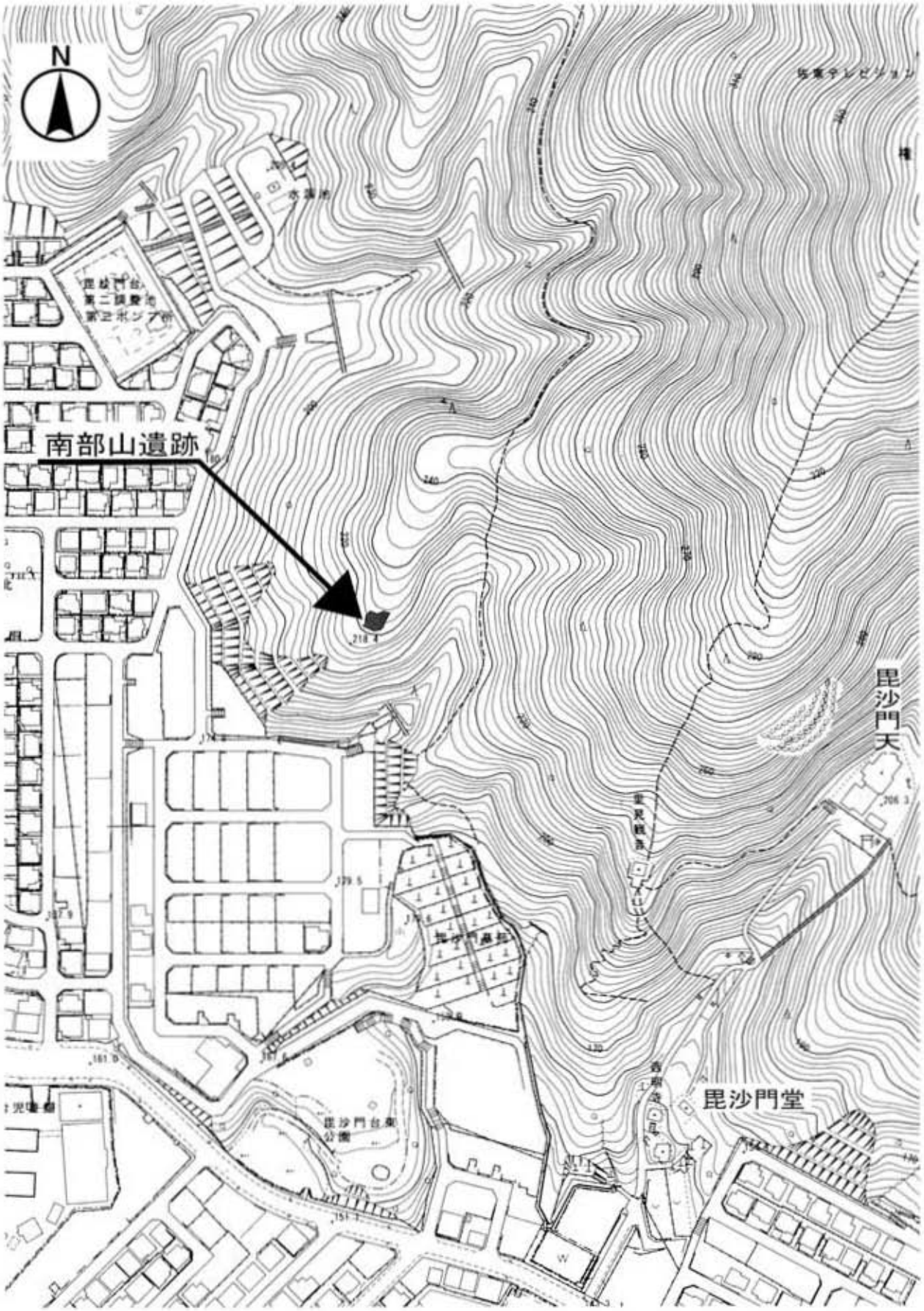
本遺跡下の毘沙門台団地造成時には、広島市を代表する集落跡である。毘沙門台遺跡の毘沙門台東遺跡が発見されている。南部山遺跡はこれらの遺跡と近接していたことになる。特に毘沙門台遺跡とは同一の居住域を形成していた可能性が高い。加えて、今回調査地より高い方向にも尾根は比較的緩やかな傾斜で連なっていることから、さらにその範囲は尾根に沿って這うように拡がっているものと見ることができる。今回はわずかな調査範囲となったことから周囲の状況は不明ではあるが、本来はこれらの広い遺跡の一部分ととらえたほうが良いであろう。

視点を少し広げると、本遺跡がある権現山山麓は広島市内でも特に多くの遺跡が密集する地域のひとつである。特に山麓東面側の大田川に面した一帯には古墳が集中していることが知られている。さらには、周囲の山裾部分でも弥生～古墳時代を中心として多くの遺跡が確認されている。また周囲の山頂には中世山城等が多く確認されている。一方、それらに囲まれた低地部分では、早くから開発が進んだこともあったためか現在のところ遺跡の確認は進んでいないようであるが、多くの遺跡が存在していた可能性は高い。



1	南部山遺跡	2	毘沙門台遺跡	3	毘沙門台東遺跡	4	権現山古墳群	5	中城跡
6	鳥越峠遺跡	7	鳥越遺跡	8	シンナシ貝塚	9	中田公園遺跡	10	植竹貝塚
11	緑井浄水場西遺跡	12	神宮山古墳群	13	白山城跡	14	相田遺跡群	15	片山遺跡
16	大町貝塚	17	大町矢ヶ谷遺跡	18	大町七九谷遺跡	19	尾首古墳・城跡	20	日吉神社貝塚
21	長う子遺跡	22	芳ヶ谷遺跡	23	大谷遺跡・古墳群	24	弘住古墳群	25	幾志山城跡
26	中小田古墳群	27	龍泉寺遺跡	28	禅昌寺西遺跡	29	下千足遺跡		

第1図　南部山遺跡の位置と主な周辺遺跡分布図（S=1/25,000）



第２図　南部山遺跡の位置と周辺地形

3　調査の概要

(1)　調査方法と経過

本調査は、携帯電話基地局建設に伴っておこなわれたもので、対象となった面積は、鉄塔基礎工事および局舎新設工事に伴う 95 ㎡であった。現場は全くの山林であったが、対象範囲一帯は比較的傾斜も緩やかで平坦になっていた部分もある。試掘調査によって対象のほぼ中央付近平坦面に建物跡とみられる遺構が確認されており、表土の堆積も薄いことなどから、伐採、表土掘削から抜根までほぼ全て人力によっておこなった。なお、廃土の搬出および機材等の搬入出は工事のために仮設されたモノレールおよびそれによって搬入された重機を使用した。

伐採および現場への進入路整備・仮設モノレール設置終了を待って、2006 年 7 月 11 日機材を運び上げた。翌日直ちに試掘トレンチの再掘削をおこなって土層状況を確認後、表土除去にとりかかった。表土は大部分が絡み合った木根と腐葉土で全て手作業であったため幾分苦労した。表土除去後、比較的やわらかな第 2 層を慎重に掘り下げ遺構確認を進めた。建物跡と見られる遺構 1 基、円形あるいは不定形の土坑プランを数基確認してそれぞれ調査を進めた。掘り下げた建物跡の床面から多数の柱穴、円形土坑、壁溝および炉跡とみられる窪みなどを検出した。また建物跡南側に接して円形土坑プランを検出した。なお、それまでに検出していた土坑のうち、今回報告の第 1 号土坑以外は調査の結果、木根跡等の非遺構と判断した。

盆休暇後の 12 日調査範囲全体の遺構を完掘して、全体の清掃・写真撮影・測量をおこなった。23 日機材の撤収をおこない現地調査を全て終了した。

その後遺物および調査資料の整理調査に着手し、報告書作成作業にもとりかかった。12 月 20 日報告書（本書）を刊行し、全ての作業を終了した。

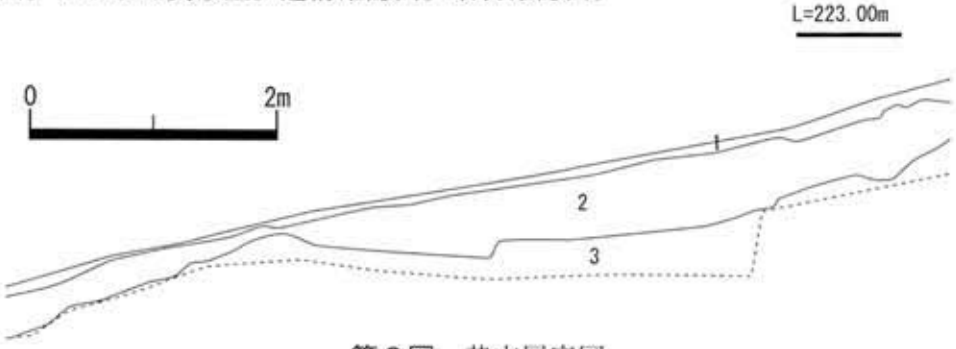
(2)　基本層序（第 3 図）

試掘トレンチ西壁を基本層序として例示する。

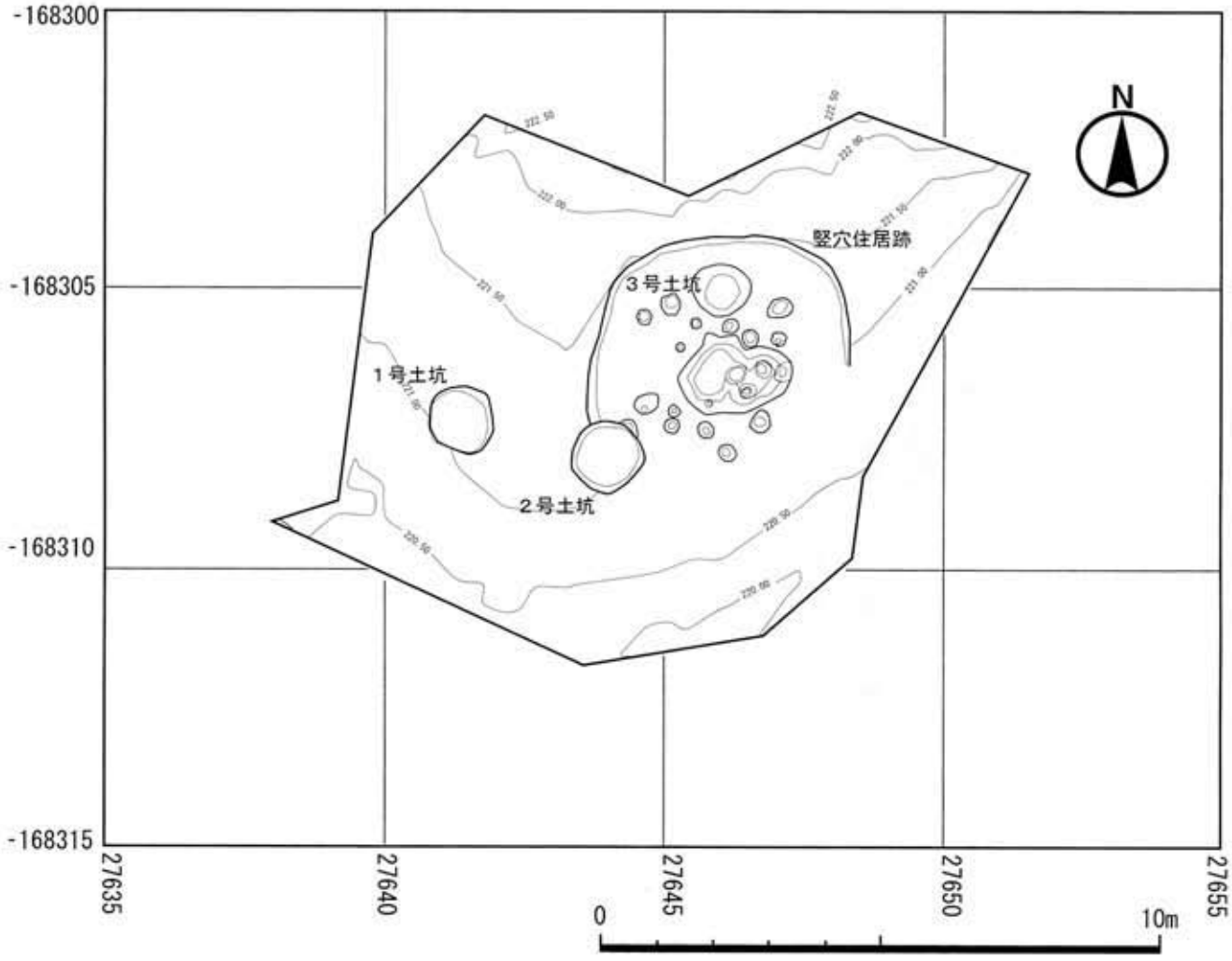
第 1 層　表土。　木根・腐葉土を主体とし地山崩落土がそれに混ざりこむ。

第 2 層　7.5YR6/6 橙色を呈する砂層。しまり粘性ともに低く、地山崩落土を主体とし木根が若干入る。遺物包含層。

第 3 層　地山。いわゆる真砂土。遺構確認面。最終確認面。



第 3 図　基本層序図



第４図　南部山遺跡遺構分布図

4　遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡（第５図）

調査区のほぼ中央で検出した住居跡。尾根稜線にあたる部分の地山には硬く脆い岩盤を一部含んでいるが、そこをしっかりと掘り込み西壁としている。壁面が遺存する遺構の西北半分の山側部分では幅・深さともわずかではあるが壁溝を確認することができた。一方、標高の低い南側は傾斜に従い崩落しており壁面は遺存しておらず、床面をも一部消失している。

完掘した時点でこの遺構の平面形は隅丸方形状となった。トレンチ壁面と遺構壁面が重なる肝心な部分を掘り過ぎてしまったことから、本来は円形を呈するものであったものとみている。

主柱穴は楕円形状の平面形を呈する深いものが４本、ほぼ等間隔に配列しているのが見て取れる。その他に中央部を取り囲むようにほぼ円形に配列された小形ピット 10 基ほど、その配列から外れたものが数基確認できた。配列状況からみて全てが同時存在のセットとが考え難いが、主柱穴と壁溝に重複がみられないことから遺構の重複や大きな建替えなどを窺うことはできない。

主柱穴の深さは、Ｐ１．53 cm、Ｐ２．58 cm、Ｐ３．54 cm、Ｐ４．56 cmを計る。

遺構中央部に円形状の窪みが三つ連なっており、焼土などは確認できなかったが炉跡とみられる。また、北側の壁面近くには円形の窪みがある。

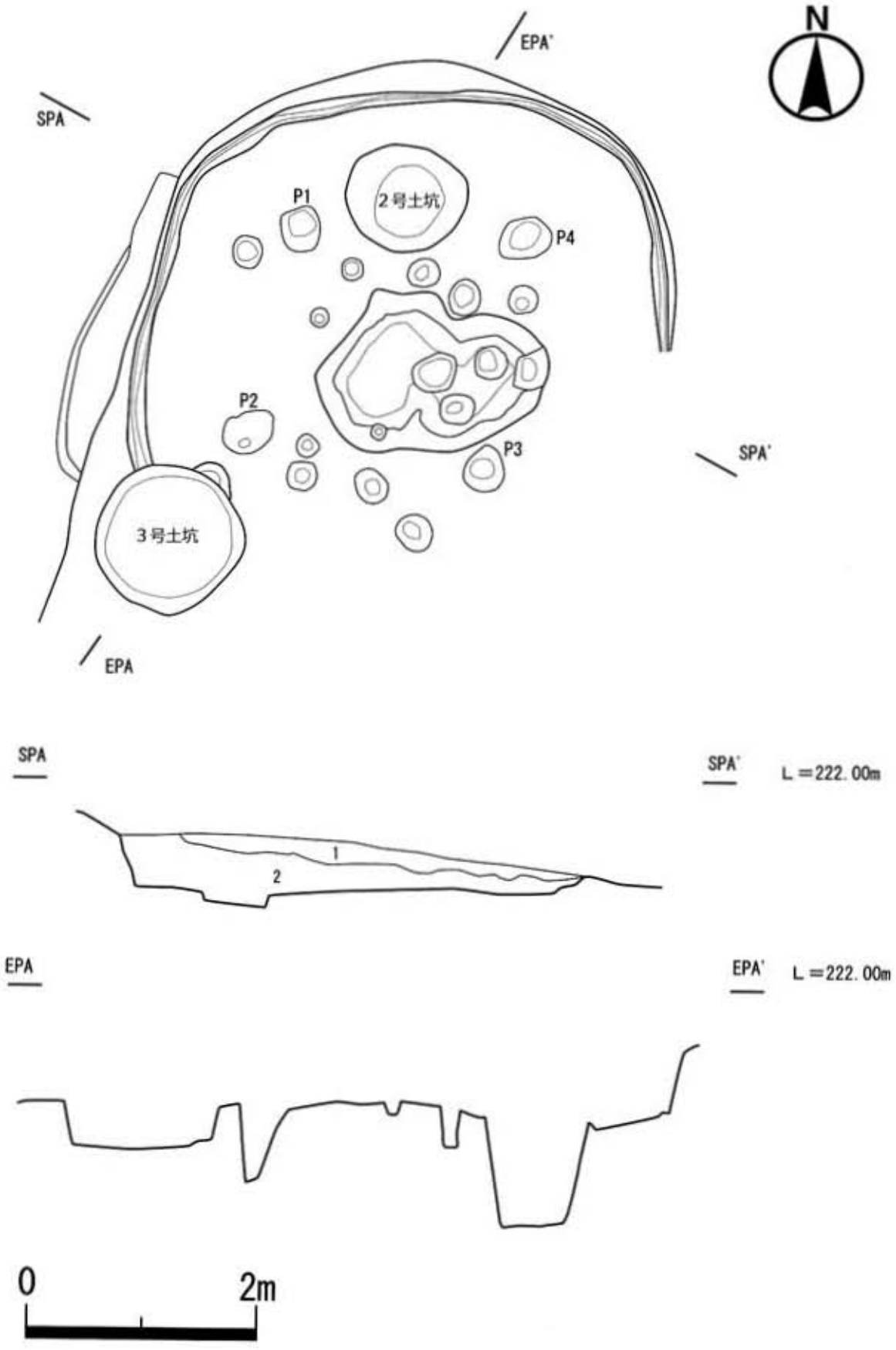
床面内北側と床面南端外から円形の２号・３号土坑を検出した。３号土坑は住居跡覆土第２層がそのまま連続して土坑底部まで堆積しており、本建物跡に伴う床面土坑であろう。また、壁面南側に接して検出した２号土坑も覆土はほぼ同一であり、隣接の毘沙門台東遺跡などでもいくつかの類例がある建物外壁に接した円形土坑である。ただし、建物跡床面レベルでもある２号土坑プラン確認面においてちょうど建物跡壁面ラインに沿うように配石された角礫数点を検出した。角礫が建物壁建材の遺存物であり、かつある程度源位置を保っているものと評価すれば、第２号土坑は建物跡より古い遺構になる。

住居跡の覆土は以下のとおり観察できた。

覆土１　7.5YR6/6 橙色を基調とする砂層。いわゆる真砂土。しまりは普通、粘性はない。主として地山崩落土から構成され、木根が入り込む。基本層序第Ⅱ層と同一。若干量の遺物を包含する。

覆土２　7.5YR5/3 にぶい褐色を基調とする砂。粒子・粘性などは１と同様であるが、全体的に暗い色調でより堅緻にしまる。また層土全体に５㎜厚の明褐色土層が水平縞状に重畳することが看取できることから、人為的に埋め戻された層土であると考えている。

記述のとおり、覆土１は基本層序Ⅰ層と同一。覆土２は人為的に埋め戻されたもので、上述した２基の土坑覆土にも同じ層土が観察できた。従って、本建物跡は土坑も含めて人為的に埋め戻されたあと残った窪みに、周囲から基本層序第Ⅱ層土が自然堆積して埋没したものと考えることができる。



第５図　竪穴住居跡実測図

出土遺物（第７図１～４）

出土遺物はいずれも土器小片で口縁部破片を４点図化した。１は甕形土器破片。受熱し赤化している。口縁端部は肥厚し角張る。１条巡る。口唇部にはかすかな、また、頚部直下にははっきりした沈線が巡る。２も甕。口唇部に１よりははっきりした沈線が３条巡りこれも角張る。口縁部は「く」の字状に屈曲し、頚部下には刷毛状工具端部によるものとみられる刺突文が施される。３は口縁端部が曲線的に調整され、頚部下にはハケ目がみられる。４は床面直上からの出土。口縁端部のみの小片。端部がわずかに薄くなる。

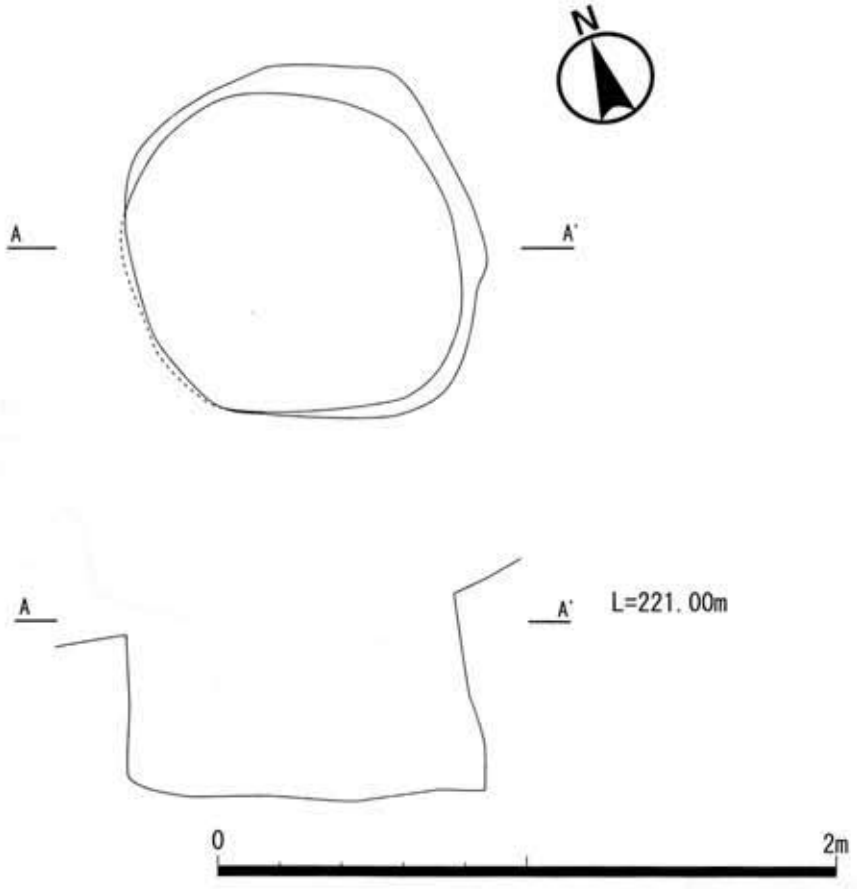
(2)　土坑

第１号土坑（第６図）

建物跡の西壁部分にあった岩盤を挟んだ西側に検出した。上端径は１ｍ前後、遺存する深さは0.6ｍ前後を測った。底面が若干広がりわずかにオーバーハングする部分もある。遺物は土器の細片のみ図化はできなかった。

第２号土坑・第３号土坑

建物跡と一括して記載。

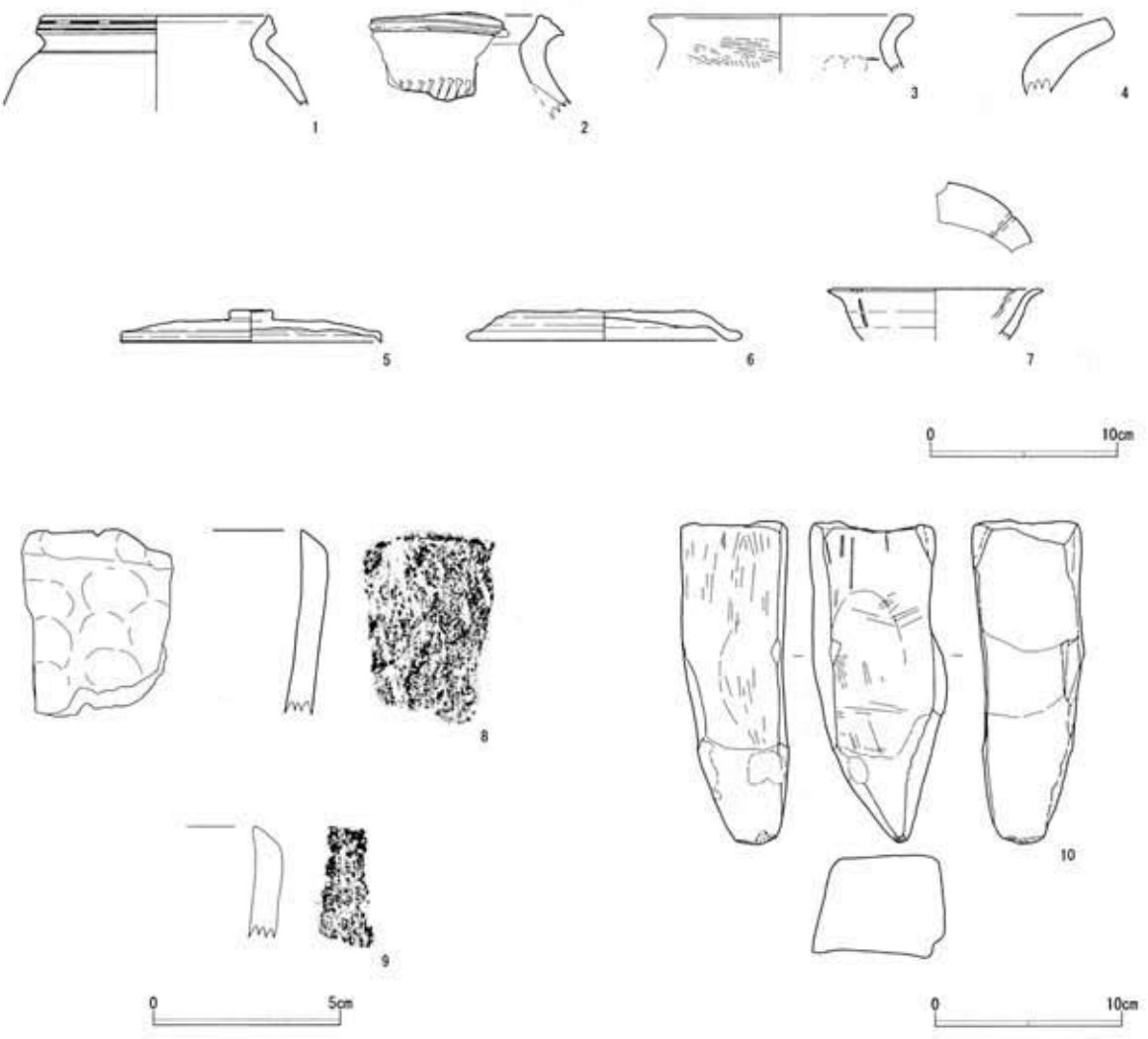


第６図　第１号土坑実測図

(3) 遺構外出土遺物（第７図５～10）

表土および標準土層第２層からの遺構外出土遺物を一括する。

５・６は須恵器蓋。７は輸入陶磁器とみられる。小碗形を呈するものとみられ、口縁端部は短いがはっきり外反し、縦方向に沈線を施す。釉薬は薄緑色を発色する。８・９は製塩土器である六連式土器口縁部破片。外面は手づくね状で、内面には磨滅するが布目痕が看取できる。10は砥石。体部側面および先端部に明確な使用痕が見られる。また先端部には敲打痕も観察できる。



第７図　出土遺物実測図

5 まとめ

南部山遺跡は標高400ｍ弱の権現山南側中腹、標高220ｍの尾根上に立地している。付近では、地域での代表的な弥生時代集落遺跡として知られる毘沙門台遺跡・毘沙門台東遺跡が調査されている。このうち報告されている毘沙門台東遺跡は尾根頂部の狭い平坦部に沿って細長く延びる集落跡で、断続的に遺構が散在している。今回調査の南部山遺跡の遺構検出状況は、まさに毘沙門台東遺跡の一部分を切り取ったように類似している。両遺跡は、最も近い毘沙門台東遺跡Ｂ・Ｃ地点北端付近までで、南東方向に小さな谷を二つ挟んで直線距離で400ｍ前後、標高差は40ｍ程度と近接している。さらには、未報告のため詳らかではないが、毘沙門台東遺跡とほぼ同内容と知られる毘沙門台遺跡とはより近く、尾根上平坦面が直接両遺跡間に通じている。こうした地形的理由からも、南部山遺跡の建物跡は毘沙門台遺跡検出の弥生時代後期終末集落の一部分とみることが可能である。

遺構外出土遺物として須恵器、製塩土器などが出土した。これらは一定の時期幅はあるもののいずれも古代の遺物であり、その時期の遺構が周囲に存在していることを窺わせる。最も、本調査区より東に300ｍ程の山中には、治暦元年（1065）頃創建と伝えられる毘沙門堂が現在でも所在している。ただちに関連づけることはできないが、一定の示唆をあたえてくれるものではなかろうか。

最後に六連式土器と称される製塩土器ついて触れておきたい。本来山口県西部～福岡県を中心に分布するものであり、かなりの内陸部からも出土することから焼塩兼運搬容器と考えられている。今回のような広島湾岸での出土例はほとんど知られておらず、現状では分布の東端に近いものと言えるかもしれない（小田1996）。ただし、今回出土例のように細片化、磨滅した資料が多いことから少量出土では確認困難とも言えることから、今後注意が必要な遺物の一つであろう。

引用・参考文献

伊藤実　1987「広島県における弥生時代遺跡の調査・研究の現状」『芸備地方史研究159・160』芸備地方史研究会
大崎尚吾・吉原輝明　1990『毘沙門台東遺跡発掘調査報告』広島市の文化財第48集　広島市教育委員会
小田和利　1996「製塩土器からみた律令期集落の様相」『九州歴史資料館研究論集　21』九州歴史資料館
高下洋一　2003「太田川下流域における約1700年前の地形復元について」『研究連絡誌Ⅱ』財団法人広島市文化財団
財団法人日本地図センター企画編集部編　2001『地図で見る広島の変遷』財団法人日本地図センター
妹尾周三　1992「Ⅰ　山陽地域の様式編年　4安芸地域」『弥生土器の様式編年　山陽・山陰編』木耳社
広島県教育委員会編　2004『広島県遺跡地図Ⅹ（広島市）』広島県教育委員会
若島一則　2002「広島湾沿岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌Ⅰ』財団法人広島市文化財団

写真図版

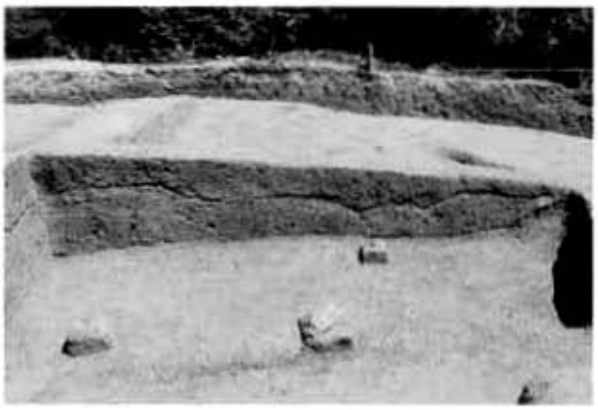
遺跡調査区全景

遺跡からの眺望（南側広島湾を遠望）

１．遺跡遠景

２．遺跡全景（調査前・伐採後）

３．竪穴住居跡完掘状況



４．竪穴住居跡覆土状況

５．第１号土坑完掘状況

６．第２号土坑完掘状況

７．第３号土坑完掘状況

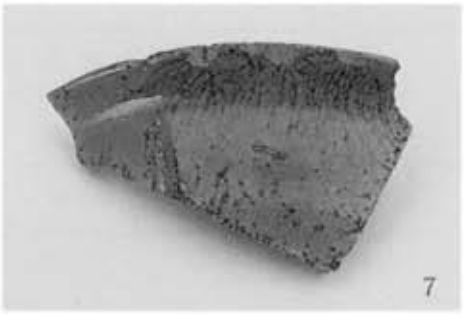
８．作業状況

1

2

3

4


7

5

6

10

8

9

報告書抄録

ふりがな	なんぶやまいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	南部山遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
編著者名	田部秀男　小柳太一
編集機関	株式会社　パスコ
所在地	〒460-0003　愛知県名古屋市中区錦２－２－13　名古屋センタービル10F
発行機関	財団法人　広島市文化財団
所在地	〒732-0052　広島県広島市東区光町２－15－36
発行年月日	2006年12月20日（平成18年）

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
南部山遺跡	広島市安佐南区上安	34100	－	34° 28′ 57″	132° 28′ 04″	20060712 ～ 20060823	95㎡	ＮＴＴドコモ基地局建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南部山遺跡	集落跡	弥生・古代	竪穴住居跡　土坑	弥生土器・須恵器・陶磁器・製塩土器（六連式土器）	

南部山遺跡発掘調査報告書

―広島市安佐南区上安所在―

2006年12月

編　　集　株式会社パスコ

発　　行　財団法人　広島市文化財団

印　　刷　西濃印刷株式会社